



古今著聞集卷第十九

草木 第九

草木者有時以昔侍特諾侍特毋尊既生
木祖句々通馳次生草野於戲春有楊梅
桃李之花秋有紅菊紫菊之花皆是錦繡之
色酷烈之句也然而昨閑今落遲速雖異隨
風任露變衰不道似樂有鳥可觀無常矣

延嘉十三年十月十二日山紀云侍侍長令新菊若

十中分之二處お車勝芳緒以申時各方領花春入

一處入自仙苑
二處入自勝口
一處獲花以若例形二處裁
火桶各苑人下二人立出矣



本れ下よ思のうよ彦了終てつひお姉えせりせ
 もせり又西のはいられんよ八瞿麦とひやうへ
 らきころをまむれ終りのあてとあぐよと終と
 山よあゆいあよ無つりあれよつて花山の身いあつ
 やせる海とよや

天曆七年十月十八日あとの侍伝たむとつらあ
 とあくお菊とまのりまるとま上法原友東北孫座
 南北才二つふお席主御東の曾子よ佐作の
 延長十三年侍伝獻菊の目只た東のあ原定
 一人佐仍おお分た念_ト今_ト日_ト教_ト人_ト既_ト作_トお分

とくお大長太納を源頼朝系儀昨氏頼下三を
 たた_トと_ト大_ト納_トを_ト源_ト頼_ト朝_ト系_ト儀_ト昨_ト氏_ト頼_ト下_ト三_トを
 右方といた菊のまご作かうひくはるをたふら場取
 よう紀_トの_トを_ト後_ト百_トふ_トり_トて_トは_トあ_トれ_トあ_トは_トお_トま_トあ_トる
 洲濱よ菊一甲成うつてあ花人ああ六人_トと_トこれ_ト成
 かく仁ああれ西の袖あ_トれ_トき_トよ_トあ_ト清_ト府_トれ_トあ_ト花
 一物成_トよ_トえ_トあ_トよ_トの_トお_ト合_ト人_トを_ト人_ト失_トと_トり_トら_トえ_ト作
 洲濱の風流をめぐり中お那の霧よ菊れ枝
 とつら_トん_トを_トせ_トり_トま_トあ_ト首_ト成_トく_トと_トは_トあ_ト菊_トを
 ひう_トう_トあ_トて_トま_トの_トせ_トは_トり_トを_トれ_トん_トあ_トび_トく_トり_トあ_ト海_ト

おのきつゆかどに安婦よほくものせれどそれも
 雨をぞくともありきるうとさうこれあやふけ風流た
 よがりありきりあふひれあふさうけつらえきえ
 新紙書つる事たふたあぐち大長屋養うまのある
 八右花とち務あかかきねあは久ふ歌は則
 せつ花可あれた務作云事だへ何たうす成または耐
 大長屋とましく夏方の三卿小舟酒とこおれぬ
 日揚角あつとらうかんとさかあつとらうか
 せはへそまらうと花あさやうきまどかあゆま
 ありせれど作よらうて夏に如よきり何たおとぬ

才之花たうらへとあくら礼装とらうけつる
 と養とな束の控は痛息よお合人揚知信がつらう
 まらうきよ次た方うた信ああおへてあゆわり
 せりう後た方う相お下た方近光御下あ作ら
 つるのゆこひわあとめさあとあくとらうてまらうて
 西屋の南意よこらうす別あ人とりてよあさうけらり
 ちとせあつとれつるあはとさうあつらう
 ちくれんかうそくーかりせれ
 寺ののまひけのさうかあうらうら
 おきしつとせぬけそんくせぬ

右あり

左あり

後帝成養と云方温川邊近御曹親來養眞
 年脚也尾秋者ぞつらまつりせり右方後切葉
 の府生泰良依を傳方さつらつ海の家後く舞
 ぐえんの心人よまはしりたりたねで揚負まひの
 まらむせぐりりめして他年の海を歌うりきる成依
 の作ふよりそ餘曲とバ倍しりたりた方百葉ふた
 平末右石川末也保末也へ年終く又よ双調と
 養とと養法よめえたる侍長末河竹の小造り
 こら又樂末の書と回末のひぐれさふ作て或
 ハ強或ハ吹強けるふは器と依と又侍長よ作く山筆と

ちりあ事下よりさたよ山登の南邊よま物西厨子
 一掃とそくぐえんの山筆成さつらつとつらつ或の
 親王和琴と浮し保た酒言器器と浮しり酒徒
 とつらつとつらつ御下お祿とあ又由みさまのりあ
 或の親王ふつありせむる親王すつらつら由あれ陽る
 よりあよとつらつ浮葉しあひたり南の也階よる
 の海りく度おほくあつよあ成さつらつは身り
 くらりきり細を御押歌のまあけを獻とつらつ
 しまれたり

南原尺儀の村との西村或る仁守的親王れあゆの儀

白ひ異なるりて入るる一より入るるをさるるてまほしくは
 くらふ座けよをねだり又わしね事とぞくらふくらむを
 くらひ代くはつとみ貴とて勢ありての事とせりあり
 兼久のちの権以形を御下とて一何とせけよとてりかえ
 遠内裏ありし小この権のつ孫大監物源光朝が
 ようり入る多海より一あつと先りくら入るをさるる
 いづきの時のゆひよとてりあをんあつとつらねりそ
 りつねりくら座けね事と今つわとだめもなりくら
 ありとてりくら

康保三年因八月十日有作物不盡おあつとつら





古今和歌集 卷之八 六

扇のぬれ小庭よ前栽とらうききりおたのめあふ
お下治る海お下親お下中後お作侍長お後涼
ぬれ小庭のよのこころはあはれ酒籠取りて
男女房よ海小庭よ入く侍長唱あへ後経以奏
と又よ光永歌よぬれ枝小庭ひつりともあはれのおあせ
とりあふのゆききりきりきり侍長よ作くうて
とりあふのゆききりきりきり侍長よ作くうて
海秋花とぞ侍長を侍長よあはれ侍長おあせ
光お下ととらうききりきりきり侍長よあはれ侍長おあせ
と後とらうききりきりきり侍長よあはれ侍長おあせ

それゆかり多く作どこのひまひごあふんそとふ
つよまどりのあひごしてあまきひまひごそのあま
物下さるるんを審判くちん

いあうとれ
侍長湯作

おれそれとさくおれくちあまの

いそらあまのひまひごあま

あうとれ
長門権守有忠

くちあまのひまひごあま

あれいあまのひまひごあま

あまの

あまのひまひごあまの

あまのひまひごあまの

あまの

あまのひまひごあまの

あまのひまひごあまの

判のいごのひまひごあまの
あまのひまひごあまの

宇治後回条大納言公任のひまひごあまの
あまのひまひごあまの

せきれぐち納公梅のそんらんをゆらぐ身より六
 いふゆづといふやされたるまは補し補との備ふぬく
 自余の花のこころつゞたかりふせり大納公恐と
 ちしつうく備下りされどもあぐらまのわけがな
 紅梅の敷いりたそくそくさくさくをゆ優
 あぞゆらるるに記よるこり
 長元元年十二月十日百昭陽令れさくそくそく
 深衣ひぐさくそくそくそくそくそくそくそくそく
 どもおりのそくそくそくそくそくそくそくそくそく
 ひうらうをうまわらこころほりけりそくそくそくそく

うききさるらう比のわづらわら木のおりうき
 事もしりたよや

永兼六年又月又日内裏は葛蒲の指合をそり
 びとて三月晦日塩籠れよまきやひらう物こり
 有上人お紙巻りしきれ揚角わりのそり又鶴合を
 ちりそ揚角なれおころて葛蒲の根はわをそり
 揚角とせせきさるるは柳葉永兼三年十月
 赤合の儀のごく申文曾旅官これさくそくそく
 内大臣於宗はあひあは梅家大納公信家山野文
 中納公兼於之りひのうき隆公信長中納公信長

二条中納言信忠申文の事理補た掌ね中納言忠長在
 中將信房之位少將忠家等と事り終ひたりた名れ方
 人たふおれんぐまのりまの由書よわがうと供
 ども後た若れ又書とての事申言人なりまの南乃
 ひらの産れ赤のるよ赤面の事あうとまの剛濱
 とつりてまのりひれね然らうとて又おれとて書
 まのり信書とて書ねと書つたての事あひ
 よ那のやうな事あうとて書あひれとまのりまの
 書一巻ひとく像銀とて紙とて多紙形と撰て
 とあくおの又書とてまのりひれの産く書紙と

して叙々あてくみらりて虎魄と抽とてまのりま
 とひとてまのりまのりまのりまのりまのりま
 の産とて信の産よおれとて根の産とて
 ねの上よとて剛の産りふとまのりまのりまのり
 あもまのり又書とて流とて剛の産りまのりま
 の人く赤の産れよ不作つたての事あひとて
 とて川産人まのりまのりまのりまのりまのり
 小ねとてまのり高蒲とつりまのりまのりまのり
 沢よ又産人まのりまのりまのりまのりまのり
 とて川大穀だいとまのりまのりまのりまのりま

小幡常のきく人としつりてこも根の上よまめ
 和あとうくこふ邦をこしてつれり又兼玉あが根
 とらひてまらぬれあふまき兼玉のれ全邦をえはく
 きり方の人ぬれまのあは作もはま等判れまあま
 く河越人一人これ然りてそそ又其のぬれきたまき
 とらぬま行其のていとしつりて行まらうくすま
 の物こま後作まより入らふまといつりてた本をぬ
 れこのそおひてゆあおの實子とるてあまらり
 て産ふつくぬた辰脚方の兼形に伝まに控捕に後産
 くと頭乃舟控家下衣歌乃中將資綱下まき

又まれ下よ作といひりよたぬのうぐれままのく
 入もあま作くぐんのま二入陸あにの子息これぬ
 とよ作一きり乃舟控家下良基下とら乃中將
 資綱下基家下とら乃あひまらうくゆま入ま
 作の控家下まが根根ぬあて良基下よまが
 南のひまうまのまき一むたまうこれまら長みまを
 わらそふたの根ま三人者の根ま三人のま右捕にり
 但たうこまらうまらりまらまらまらまらまら
 ままらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
 首まらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

藤原隆依ふりぞ外下すけ藤原資綱すけ外下すけ判者はんしや内うち長ながなり
 歌うた高たか蒲か野の公こう早はや苗なへ志し統と之のものよみ終はつりてあり
 ぞれと中なかつの座まふくりりつてはよ後のち統との座ま度たと
 めの和わ琴きん西せいの筆ふで二に位ゐ中なかつ納のう云い琵琶びわ隆たか依よ外すけ筆ふで
 定さだ家け外すけ下した笛ふえ筆ふで葉は隆たか依よ唱なう云い資すけ仲なかつ外すけ下した子こ洞どう亮りやう
 のら内うち長なが沙さ筆ふで又またふりて身みとてうては島しま成なりぬ
 て此こゝ座まの下したよとていふまことまのまは上うへはゆえと
 とせあり判はんしやへ後のち拍はつ子しを仕つかせしはしむのの内うち
 長ながは作つくくると長なが作つく依よ外すけ成なり座まは神かみつらとて安やす若わかき
 とてあふ律りつ曲きょくの終はつりよ終はつらよ沙さ成なりとてゆえに

あり退ひ出でと成なりあとの孫まごの終はつりするところや
 隆たか依よ外すけ下した筆ふではほぐてげうら外すけ下した八はち月げつ十じゅうの終はつり
 統との必かならず造つく回くわい譯やくよつとありするにまゝはれあり
 なるに鐘かねのまのよありは探たづねありまの終はつりひらくは
 おひひく月つき成なりをえされど人ひとはあつあつあり
 ふとまよ切きらうりせし月つきよひつひく終はつりする
 隆たか依よ外すけ下したありしとて外すけ下したありて夫おつのけあり
 してれまうの終はつり終はつり今いまのちとせけりあり
 堀ほり川がわ流ながの屋や付つけふ月つき又また有あは神かみ高たか蒲かとてあり
 ころする終はつり

進上

水追草蒲

千年八月五日

大江為武

あの城とあるよほどさかしく人ごみあや作しき
され大推ももろ強き人あうりきるに肺軟を討
弼おぬそさうひき強うわんぶえてよみゆる

キくまはしむわづれうらぶのわやめざ

進

上

水邊

草蒲

らとをのこ月いつらあせん

千年

五

五日

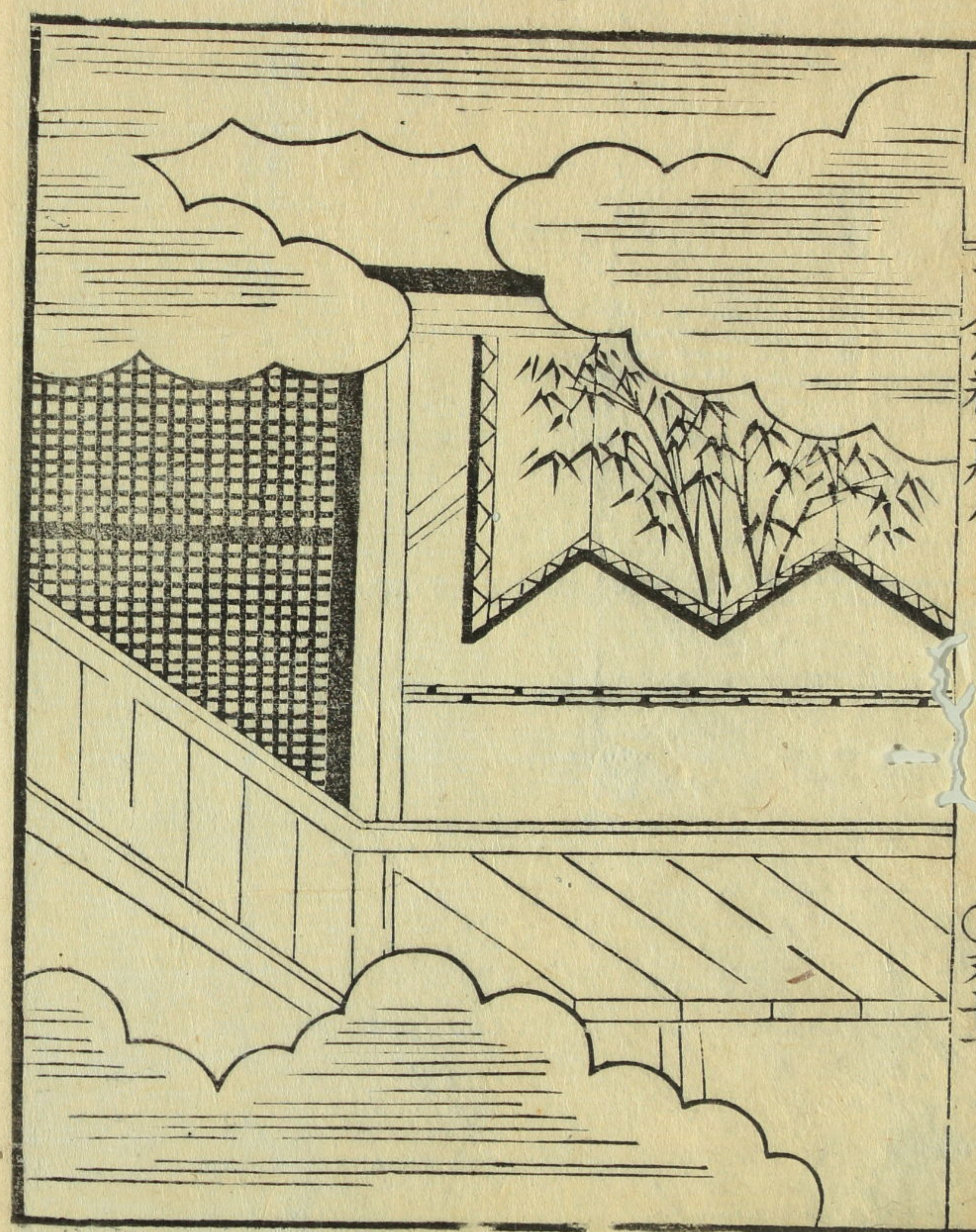
大江為武

嘉保二年八月廿八日上皇より物敷より前載合
ありきり意自ふ言人とりくこれかりらる上人
人西衣は信者よ事さた衣とりくききり控申納

云基たゆとた名のゆとたよめく宰相申物宗通に
取た名のゆととび介らる二人あ上十余人おとら
南てんの覆れた門ぶのすまは南面の如流の匠方なり
りく一也一の具ありまがた敷らんぐ敷らたおわ
ひよりゆくとた方よ作ドもひかり大匠申文を更更
右方ふさあし敷あまてん作ふよりて高屋よりゆら
方人たふんのりく 意 敷申納云 基名 ほか申納言 匠房
たまふんのりく 後実 治るに 通依 宰相申物 宗通 礼重衣
たぬい鳥帽子あまてんまがた方の人くまりて好基
とたゆくのその作ふよりて同流并より守さるの

眞のり多しきをり物多しきをり
 此うらとまゝありせんといふあり徳あり
 二人うらとまゝありせんといふあり徳あり
 方人下しれ布衣之きり
 掌卿お達しきり何別きり
 右方の人よありきり
 左きり
 して立させり
 どののめり





ませとゆひくせんさうしりきりなるとのく
 萩女^{しげ}御^ご成^{なり}着^ぎ着^ぎ中^{ちゆう}に紙^しをりあれ別^{べつ}今日^{けふ}のわあ
 れ部^ぶととぞた方^{かた}わあ鏡^{かがみ}と舞^まふききりけん鏡^{かがみ}は
 小^こあとりたしりた方^{かた}れあひれうなうたきり
 どりあし脚^{あし}深^{ふか}明^{あき}ぬ八^{はち}扇^{せん}母^{はは}ぞきりきりきりきりきり
 六^む位^いを仲^{なかつ}よおりてわあ紙^しあてああよあきり
 後^{のち}藤^{ふじ}脚^{あし}とめとた字^じ忠^{ちゆう}在^あ結^{むす}傷^{やう}たたのあよ人
 階^{かゝり}とくさあく欄^{らん}千^{せん}おひてあくわあ紙^し藤^{ふじ}より
 一^{いち}萬^{まん}藤^{ふじ}ぞくく目^めた方^{かた}けしと藤^{ふじ}ふへく二^に藤^{ふじ}あり
 ころきりとも藤^{ふじ}ふとあ紙^しけりけりのおあく身^みよ

あそいで身まじりしより元作にありては長
和の成をんが終ふ方猶よきりく退由とち方
に由あふ作じて和方成海^くを海^くぞ中^{ちゆう}右^{ゆう}紀
まかんへり

長治二年後二月廿日わありの比内^{ひのち}の由房^{ゆふ}あふ人
せりく花^{はな}成^{なり}ん終^{はつ}りきるふ亦^{また}二^に首^{くび}よ一^{いつ}枝^{えだ}成^{なり}りてまづさ
り一^{いつ}天^{てん}親^{しん}あをんた目^めくれもまづざりきりきり見
みしえ比^ひの内^{のち}の自^{みづか}たあそまうらそ成^{なり}成^{なり}合^{あひ}ききりた方
れへく様^{さま}の枝^{えだ}をわてあらん詩^{うた}の海^{うみ}よりうやあそくお枝
とえらびくまそまきり備^{びん}海^{かい}有^{あり}賢^{けん}物^{もの}下^{した}拍^{はつ}子^しあて

梅^{うめ}人^{ひと}成^{なり}えむ々の袋^{ふくろ}終^{はつ}りもつりゆきりひむとあゆの
あゆらうやうくはやああくゆはあまきりた方^{たか}花^{はな}
とまうりまねぐよまきりあ人^{ひと}とつりきりまきり^{すしん}割^{わり}戻^{もど}よ
とそりりてまきりまきり^{えん}油^{あぶら}成^{なり}あまきりまきり^{えん}油^{あぶら}成^{なり}
あそ人^{ひと}くつりまきりまきり^{えん}油^{あぶら}成^{なり}あまきり

嘉應二年九月上旬^{かえい}中^{ちゆう}梅^{うめ}桃^{もも}季^き花^{はな}実^みえまの
そくれあそくゆきり延^{えん}表^{ひょう}九年八月あそくゆきり
とるしくあそくあそく^{やち}抽^ひ櫛^{くし}みぞとさたころきり
聖^{せい}代^{だい}あひびりあそく^{まゆ}瑞^{みづ}ふりゆらん
又^{また}月の比^ひ由^{ゆう}位^い上人^{じゆうじん}慈^じ勝^{しょう}へあそくまきりあそくあ

とぶあざとく川に成りさしつりきほをきてよみほ
りまを致

の川にさく懸野まうてけなりのさ

あまらる先とそりあづりのま

兼元四年正月北陸内裏大炊女 あて目録とて 漆
仲期下藤人町へあざとく大炊女門おりては
らんよりなえくせわの衣冠の人まきりま衣女
物さる先みまのあやと見侍まぶさのまへうき
しほらにわたのびらく持衣まする侍一人がしんまり
とれやんと見まらよ次泉けお定ぬお下へまり

今やあよまあやんとあやくさるに南あへて
りこのの前のり八重櫛のまよふつりてまきりむ
のしほよまわらぬは櫛と見あげくやひらく種
侍とあふのほさく校成まきせておらるその校と
絶の袖くまあまてあまきりこのお何とあは種
優よまへまが肉くまうまひらしてまきりむと優
てつごまにせんくまきりまきりまきりまきり
まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり
のうすまきりまきりまきりまきりまきりまきり
まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり

まきりまきりまきりまきりまきりまきりまきり

ふんえんやふんれいもせし

き

海にわくと君よつらあるのみや

唐のくもまればげとそおよ

項蓮院の十月れしち信事お定ぬたかぬは長素
内しそまのく鬼の同よそをまやうくれ物くはして
さあしひきるあし海あより前結さる次のあより
さうさう結みしる櫃紙とまそそこの紙紙一えび
へくあふよそまのせよそそと東内信よりそそ
出されありまれば定ぬたかぬは長素

為者ハ信公信りてまのきるとかみんしと鼻の
くごんの結さうひくさうすへ一室のあびげし
ゆごさくやうわるとんゆうくそせ

田舎村の裏よそ花あそをまきりんくめんくは流
とやごあしと花もまらんね花人者村ちある様の花
花あそ人くそかをそ南庭に池のくそふわりまそり
まゆ筒と付くた花と書りりすりし事ハ孝道がた
うんしれ鼻のおやとぬよよりそ院の作よそ鼻が
あうそそまそらあれふよりそ大也く筒と付り
まゆ此鼻のくそふそ結さる

きりお今新り

お新い枝汲みだて木の葉はあつた

あしそ枝はく先なりなまき

おゆりをおもくくつとせりなるが

二品時慶のの後あつたゆきまのあつた鞠こまりのかつた柳やなぎを

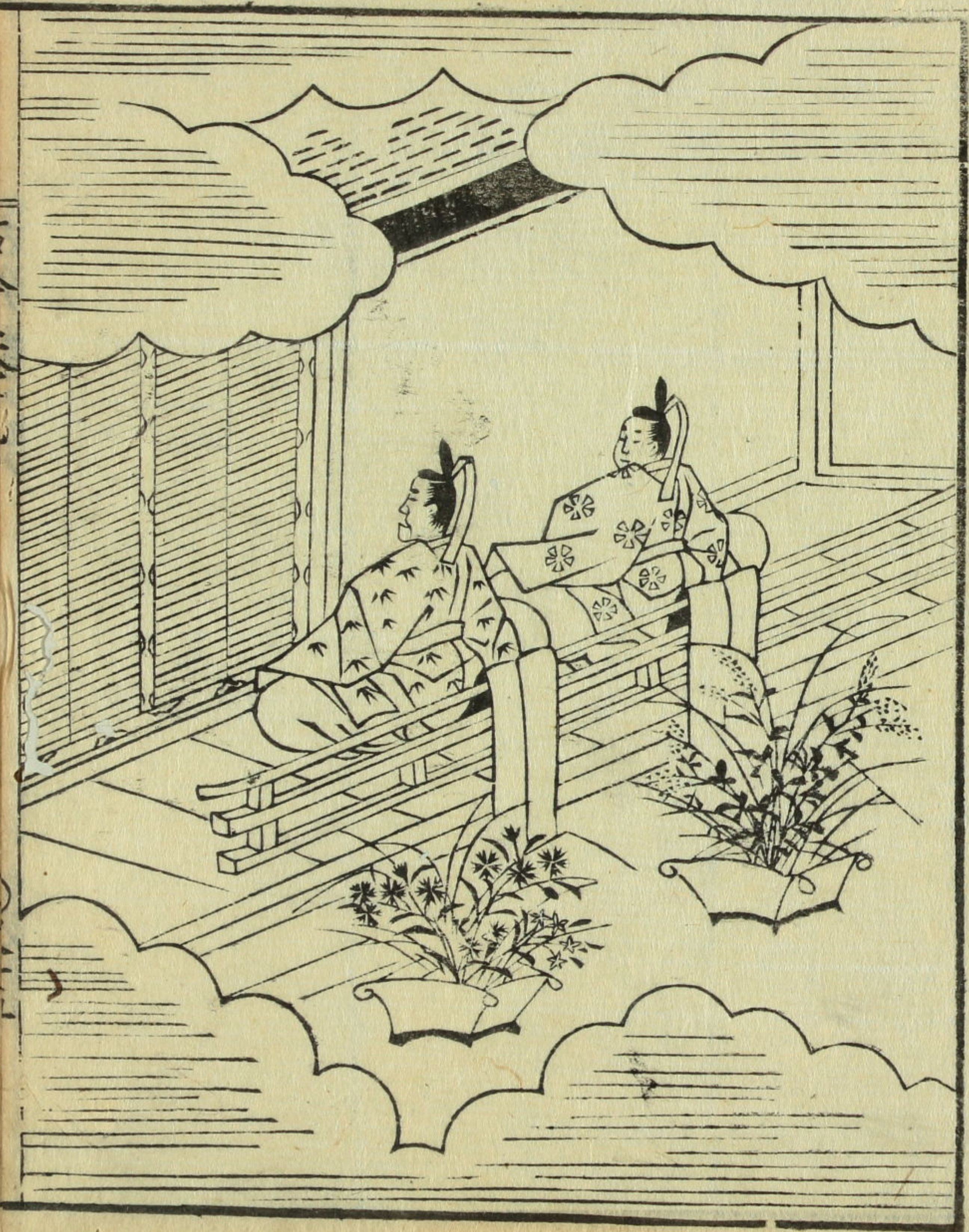
まきりそ内成美のすこしおよ鳥すなひはきり

いごおりのいんちうすそすなひとびくびくひり

桃ももの本よつたりせきりんとわやこわたりきり

一ありとゆき雲白飯より柳とめえりきり二品

と此地このあよひきりきり種物たねものをれどあつた





ひろくしぬみずを付るりきれんすゝやうにひろく
 のつぎめてもとくひくわりて集つてさういひせ
 きふ出つてひのてのまむつてを柳のうら二牛を
 かりて集うらかりすのまをひにほもほじひと踏
 てざり鳥ハけしやとくひくわりきるたこそいま
 一葉あふうらきくきくろきるが二牛あぐらわねきり
 それよ中あよ今二牛ありくるも同くねなきるあが
 けうねさうきく友まうきくわくあやちらくほ
 の井の柳を二牛地あうりうらうきるたとい
 定ふあの本ゆりくくれりきるたとい

建武元年二月初、大政大臣等より、
内務を以て侍を置く、
久しと人としてその梅のまふじよび甘さをも
内務より

多と香もくさくさめ、梅のこま

ぬきふかりの本よのきり

あまきおより作紙をけ、梅をわあさうり
わあ、さうすけ澄然お下、白河のむとてより、
んよまうり、梅やしらさかひ、
うらとえあんさりのあふま、
らとえあんさりのあふま、

よみつらりける

うらうらむらむら、梅の物あきん

らとえあんさりのあふま

あまきおより作紙をけ、梅をわあさうり

今更光院より、みわて、梅をうらとえあんさりに

ひよひ甘侍あり

あまきおより作紙をけ、梅をわあさうり

うらとえあんさりのあふま

松樹と、まきぼ身木といふ、梅をうらとえあんさりに

あまきおより作紙をけ、梅をわあさうり

とわくしあべりりもみどりなれどこれを真心に
ゆりて貞松八年のさびさにわくられ名長八巻乃
わやうとふん南と潘安に西征賦よりけり
あのかう後なり

荻家老宰府小お海一巻しぬらきる法

こらわうはあわひとせよ梅のか

わくしぬりてまかすれそ

さよみとさほひくともあ城のぞくはらぬらり
まひくのらに紅梅屋の梅れ片えさ梅り
ひくひほひく

ゆらさうのむれ物のおせなりをな

いたひりーのころ後とあま

やまぐめさせほひりきれぐりの本

先久於故宅

廢籬於久年

麋鹿於佳所

無主又有花

わくしぬりてまかすれそわさ梅りてあまらり
あつちそあまらりてまかすれそ

古今著図集卷之十九終

